

かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を



特集 フィリピン人宣教師が見た日本宣教／3ページ

このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましようか。もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。

Ⅱコリント十一章二十八〜三十節

八月下旬から九月上旬にかけて、フィリピンからバングラデシュに遣わされているジョン・マニエル先生と、国内の幾つかの教会を訪問する機会が与えられました。その訪問で、それぞれの遣わされている街をこの目で見ることで、また先生方と話しをする時を通して、祈りの課題がより具体的に示されました。

日本人が救いに導かれ、自立したクリスチャンとして成長していく過程には、牧師、伝道師、宣教師の多くの祈りと心配りと働きがあります。日本人が救いに導かれるだけでも貴重なことですが、そこから主にお従いするクリスチャンに成長していかなければなりません。その過程で、これまで普通の日本人として生活していた人たちに、礼拝出席、十分の一献金、奉仕などを聖書を通して教えていくことはとても気を使うことでもあります。誤解が生じたり、重荷を感じさせることもしばしばでしょう。そんな心の痛みを覚えながら忍耐の限りを尽くして主の働きを全うしている主の働き人たちのために、私たちは敬意と関心を払い、祈りをしていかなければならないでしょう。

(榎本昌博)

神の祝福

JBBF国内宣教委員 井口 拓志

「こうしてヤコブがバダン・アラムから帰って来たとき、神は再び彼に現われ、彼を祝福された」（創世記三五章九節）

立川教会が独立して今年で十年。すでに次の十年に向けて歩き始めていますが「神の祝福」について改めて思索中です。祝福とは、「神の愛による恵みを与えられること」（新聖書辞典）とありますが、神の愛と恵みの理解の違いで祝福の受け取り方も違ってきます。創世記のヤコブを例に話すと、兄エサウへの祝福を奪い取ったときのヤコブに、神の愛はわからなかったと思われ（創二五章）。エサウから命を狙われ、自分の家を出て独りになったとき、初めて神の臨在を覚え、ました（創二八章）。このときアブラハム、イサクへの教いの祝福の約束をヤコブに継承することが告げられます。ただ、恐れと不信の中にいたヤコブが祝福としてしっかり受け取っていたかは疑問が残ります。その後、彼は母リベカの兄の家で二十年仕え、苦勞を重ねます（創二九―三一章）。「ヤコブ（だます）」という名から「イスラエル（神と戦って勝った）」という名に変えられていきます（創三二章）、神からの地道な訓練を必須とするかのような歩み方を見ると、受身の姿勢から神の祝福をとらえているようです。「主のために、宣教のために」という献身要素が消極的ということですが、神は二十年後、再び教いの祝福の約束をヤコブに告げられます（三五章）。このときヤコブは自分本位ではなく神の祝福を信仰によって受け止めます。このあとヤコブは最愛の妻ラケルを失い（十九節）、更には再会を果たした父イサクを失います（二十九節）。身勝手な生き方の報い？神よりも大事にしていたものだから？と考えてしまいますが、この考え方は、祝福の原因は自分にあるとの考えで正しくありません。祝福の原因は神にしかないからです。「一つの国民、諸国の民のつどいが、あなたから出て……わたしはアブラハムとイサクに与えた地を、あなたに与え……と、神はヤコブを祝福しました（創三五章十一節）。神はご自身の教いの約束に基づいて信仰者を祝福してください。私たちはこの神の約束を果たしていくために選ばれた御国の民なので、そこからはずれずれた個人として祝福を求めると混乱します。以前のヤコブでしたらラケルが亡くなったことから先に進めなかつたかもしれません。神は真の祝福を与えようとされていますから、困難も祝福を見極める材料として取り入れていくことが出来たら幸いです。



立川教会も神の教いの完成に向かって真の祝福を受け継ぐ者として前進したいと願っています。困難に遭遇しても、それは神の民として扱われている証として受け取り、民としての責任を、祝福を継承することで果たしていきたいものです。「……あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。」

第一ペテロ三章九節

救いとバプテスマの証し

上田聖書バプテスト教会 日比 久恵



私の生まれ育った家の近くには教会があり、その庭や教会の中が私の遊び場でしたので、キリスト教的環境は充分にありました。しかし、「イエス・キリストを信じる」ということが、どういうことか、はっきりとは分かりませんでした。親戚が皆、寺の住職でしたので、私ははっきりとした行動や考えを持たないようにしていました。しかし、息子がキリスト教の保育園に入ったり、私の友人・知人にキリストを信じておられる方がとても多く、教会に行く機会も多くなりました。聖書の勉強をしたこともありました。洗礼を受けるお話もありましたが、実行には至りませんでした。

しかし、上田市上田原の今の家に転居した後、近所の公園で小川先生にお会いし、こちらの教会に孫の昂と共に導かれました。改めて聖書のことばを聞いたり先生方のお話をお聞きするうちに、福音、すなわち十字架と復活の意味が、少しばかりですが、私のなか

入ってきました。そして、救いが「罪の悔い改めと信仰による罪の赦し」であることを理解できるようになりました。そして、はっきりとイエス様を私の罪からの救い主と信じ、受け入れました。これまでは、救いのことがはっきりしませんでした。この教会で、救いの確信をいただきました。孫にせがまれながら教会に通い続けてきましたが、この教会に導かれ、バプテスマを受けるに至ったことは、私にとりまして生まれた時からの神の導きだと思っております。

それにしても七十年もの時が必要だったとは、ちょっと驚きです。これからの人生、私は私らしく、イエス様を信じていきたいと思えます。私には昂の上にもう一人の孫の薫がおりましたが、生後間もなく天に召されました。その後、昂を与えてくださった主イエス・キリストに心から感謝し、これからもお導きくださることを心から願って、一教会員として歩んでまいりたいと思えます。

フィリピン人宣教師が見た 日本宣教

ジュン・マニユエル

私は小学生のとき、日本がユニークな国であり、また、「日出ずる国」と呼ばれていることを聞かされました。さらに、世界第三位の経済大国であり技術、機械、医学、科学など、さまざまな分野においても世界をリードする国であること。そんな日本をこの目で見える機会が八月二十二日に与えられました。実際に日本に来てみると、日本に住む人々が経済的にも物質的にも大変恵まれていることがわかります。

日本は私が遭わされているパングラアシユの首都グツカとはあまりにも違います。道路はとてもよく整えられており、きれいで明るいです。住宅も最先端の技術で満ちています。また、多くの自動販売機を見かけました。もちろん私が見たものは、日本のほんの一部に過ぎないのだと思います。

このように豊かな日本ですが、それを霊的な目で見ると、そこにはその繁栄とは裏腹の悲しい状況があると思えました。それは他の国々がそうであるように、霊的な貧しさに襲われている国だと言うことです。道路や住宅、ビルなどには煌々と明かりが灯されていますが、実は暗闇のなかでさ迷っているのです。混乱と恐れと絶望のなかで喘ぎ、心の奥底には孤独と貧しさがあります。

そうした人々の心の空しさを変えてくださるのは、主なるお方だけです。日本もそして世界も、生きる本当の意味と満足を与えることができるイエス

・キリストを必要としています。マタイ九章三十六節にこう記されています。「また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかかわいそうに思われた。」

羊飼いなる主は、道に迷う人々に出会いました。これはまさに日本のことです。「日出ずる国」は、神のひとり子が必要としています。偉大な羊飼いは続けて、「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、収穫のために働き手を送ってくださいるように祈りなさい」と言われました。私はこの収穫への主の呼びかけに応えられたJBBFの牧師たちのことを思い浮かべながら主の御名をたたえています。皆さんはそう思われたいかもしれません。皆さんはこの「日出ずる国」で最も重要な人たちです。

私は日本人が勤勉でまじめな人たちであると聞いていました。そして、それは事実でした。それはJBBFの牧師たちにも当てはまることです。私は皆さんが主から託された働きを忠実に実行していると信じます。

滞在中にしばしば、「日本は伝道の難しい国で、私たちの教会は大きくなく、とても小さいです」という言葉を聞きました。また、フィリピンの教会について質問されました。たしかに、フィリピンのバプテスト教会はすばらしく成長しています。フィリピンは多くの島々で構成されていますが、それぞれの場所で新しい働きが始められて

います。また、神学校や研究所で多くの若い男女が訓練を受けています。その働きに加えて、フィリピンJBBFはさまざまな国へ宣教師を派遣し、その数も増加しています。しかし、それは神の恵みによるものです。日本の牧師たちの働きが劣っていると言うことではありません。宣教の成果は、私たち人間の働きではなく、主の御業だからです。主は異なる場所、異なる状況のなかで、異なる働きをされます。宣教の働きは、それぞれの場所で異なる特色があります。

私たちが宣教の働きについて問うべきことは何でしょうか。それは、「私たちは一生懸命にその務めを果たしているか?」「忠実であるか?」そして「私たちに委ねられた働きは何か?」と言うことだと思います。神は預言者エゼキエルに「見張り人」としての働きを与えられました。見張り人の仕事は人々に警告すること。そしてその与えられた仕事を忠実にこなすことです(エゼキエル書三章を参照)。

※4ページへ続きます



※3ページからの続きです

話の要点を明確にするために、私が日本で体験したことを証したいと思います。私は国内宣教委員長の榎本先生と先生の奥様と一緒に、日本の各地を訪ねました。そのなかで最も感慨深かったのは、掛川から九州へと向かう旅での出来事でした。旅の途中、京都手前のサービスエリアでのことです。一人の青年がヒッチハイクをしていたので、榎本先生は車を停め、彼を乗せました。彼は日本人とアメリカ人のハーフでしたが、中身は全くの日本人でした。私たちはそこから九州までの約八時間を彼と車の中で過ごしました。私は彼に天地創造から十字架までの福音のメッセージを伝え、榎本先生と奥様は救いの証しを伝えました。残念なことに信仰告白までには至りませんでした。したが、私たちは私たちに与えられた役割を果たしました。主を受け入れるかどうかの責任は彼自身にあります。私たちの責任は福音のメッセージを明確に語ることです。そしてそれは「見張り人」に与えられた役割なのです。

(マニユエル師からいただいた原稿はこの四倍です。続きは以下のホームページからご覧いただけます)

<http://jbbfbcmission.web.fc2.com/>

2014国内宣教カンファレンスのご案内

「キリストを宣べ伝えよ」

～あらゆる知恵と力と心を尽くして～

2014年1月6日(月)・7日(火)

テーマ聖句：ピリピ1：20

「それは私の切なる祈りと願いにかかっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。」

テーマの主旨

困難な伝道生涯だからこそ、ことさらにイエスキリストに夢中になり全ての知恵を用いて伝道に専念しよう！

国内宣教は開拓伝道所だけの課題ではありません。

国内のすべての教会にとっての課題ですので、独立された教会の先生方のご参加もお待ちしています。

講師：齊藤 雄典先生（沖縄聖書バプテスト教会）

会場：ホテル開春楼

（静岡県浜松市/JR弁天島駅正面）

費用：おとな：4,300円（詳細と参加費・交通費の補助については別紙をご覧ください）

*分科会、子供集会あります。集会は全4回！二日間の中にみことばを凝縮させています。

*分科会では、沖縄教会での取り組みを交えて、青少年への働きかけについて意見交換をしていければと計画しています。

●先号のフィリピン・キャンプ

ミニストーリーについて

先号のかいたく誌六十一号に掲載されましたフィリピンにおけるキャンプミニストーリーについて、幾人かの方からご感想・ご意見をいただきました。まず、国内宣教委員会は、各個教会の自主独立と自由な判断による交わりと伝道を支援し、それに奉仕することと伝道としていきます。よって各教会の信条や判断について意見を申し上げる立場にはないことをご承知ください。しかし、この記事の内容に説明が不足する部分がありましたので、それを補足させていただきます。

一つ目はバプテストマについてです。先号の記事で「意味をしっかりと説明し」とありますように、バプテストの立場でなされたものと理解致します（実際にバプテストマはその青年をキャンプに導いた牧師が授けています）。二つ目は、このキャンプは、フィリピンBBF全体の立場を表すものではありません。三つ目は、そのキャンプの目的の一つは、麻薬や暴力、乱れた生活の中で生きている青年たちを導くことで、彼らの中から牧師になった人も起こされています。

昨今、日本の教会から青年たちの姿が見られなくなっています。方法論については様々な考えがあるかもしれませんが、この記事を通して私たちがもっと若い魂を救いに導く情熱を抱いていくべきだと教えられました。

献金振込先（郵便振込）

00140・2・654375

JBBF国内宣教委員会